

Voici, publié sur www.shobogenzo.eu le texte de *Tsuki*, étudié avec Yoko Orimo dans l'atelier à l'Institut d'Etudes Bouddhiques, les 2, 16 et 30 novembre 2015.

Tsuki (La lune ou la réflexion) est traduit en français dans le tome 2 de la Traduction intégrale du *Shôbôgenzô (La Vraie Loi, Trésor de l'œil)* de Yoko Orimo (Ed. Sully). Le texte japonais ci-dessous est à peu près présenté en paragraphes comme dans le livre de Y. Orimo pour faciliter la recherche.

Ce texte est le n° 23 de la Nouvelle Édition.

正法眼藏第二十三 都機

I. 1. 諸月の円成すること、前三々のみにあらず、後三々のみにあらず、円成の諸月なる、前三々のみにあらず、後三々のみにあらず。このゆゑに、釈迦牟尼仏言く、仏真法身、猶若虚空。応物現形、如水中月《仏の真法身は、猶虚空の如し。物に應じて形を現す、水中の月の如し》。

2. いはゆる如水中月の如々は水月なるべし。水如、月如、如中、中如なるべし。相似を如と道取するにあらず、如は是なり。仏真法身は虚空の猶若なり。この虚空は、猶若の仏真法身なり。仏真法身なるがゆゑに、尽地尽界、尽法尽現、みづから虚空なり。現成せる百草万象の猶若なる、しかしながら仏真法身なり、如水中月なり。

3. 月のときはかならず夜にあらず、夜かならずしも暗にあらず。ひとへに人間の少量にかかはることなかれ。日月なきところにも昼夜あるべし、日月は昼夜のためにあらず、日月ともに如々なるがゆゑに、一月両月にあらず、千月万月にあらず。月の自己、たとひ一月両月の見解を保任ほうすといふとも、これは月の見解なり、かならずしも仏道の道取にあらず、仏道の知見にあらず。しかあれば、昨夜たとひ月ありといふとも、今夜の月は昨月にあらず、今夜の月は初中後ともに今夜の月なりと参究すべし。月は月に相嗣するがゆゑに、月ありといへども、新旧にあらず。

*

II. 1. 盤山宝積禪師云く、心月孤円、光呑万象。光非照境、境亦非存。光境俱亡、復は何物《心月孤円、光、万象を吞めり。光、境を照らすに非ず、境亦存するに非ず。光境俱に亡ず、復是れ何物ぞ》。

2. いまいふところは、仏祖仏子、かならず心月あり。月を心とせるがゆゑに。月にあらざれば心にあらず、心にあらざる月なし。孤円といふは、虧闕せざるなり。兩三にあらざるを万象といふ。万象これ月光にして万象にあらず。このゆゑに光呑万象なり。万象おのづから月光を呑尽せるがゆゑに、光の光を呑却するを、光呑万象といふなり。たとへば、月呑月なるべし、光呑月なるべし。ここをもて、光非照境、境亦非存と道取するなり。

3. 得恁麼なるゆゑに、応以仏身得度者《応に仏身を以て度すべきことを得べき者》のとき、即現仏身而為説法《即ち普く現ずる色身を現じて為に法を説く》なり。応以普現色身得度者《応に普く現ずる色心を以て度すことを得べき者》のとき、即現普現色身而為説法《即ち普く現ずる色心を現じて為に法を説く》なり。これ月中の転法輪にあらずといふことなし。たとひ陰精陽精の光象するところ、火珠水珠の所成なりとも、即現現成なり。この心すなはち月なり、この月おのづから心なり。仏祖仏子の心を究理究事すること、かくのごとし。

4. 古仏いはく、一心一切法、一切法一心。

しかあれば、心は一切法なり、一切法は心なり。心は月なるがゆゑに、月は月なるべし。心なる一切法、これことごとく月なるがゆゑに、遍界は遍月なり。通身ことごとく通月なり。たとひ直須万年の前後三々、いづれか月にあらざらん。いまの身心依正なる日面仏月面仏、おなじく月中なるべし。生死去来ともに月にあり。尽十方界は月中の上下左右なるべし。いまの日用、すなはち月中の明々百草頭なり、月中の明々祖師心なり。

*

III. 1. 舒州投子山慈濟大師、因みに僧問ふ、月未円時如何《月未円なる時、如何》。師云く、呑却三箇四箇《三箇四箇を呑却す》。僧云く、円後如何《円なる後、如何》。師云く、吐却七箇八箇《七箇八箇を吐却す》。

2. いま参究するところは、未円なり、円後なり、ともにそれ月の造次なり。月に三箇四箇あるなかに、未円の一枚あり。月に七箇八箇あるなかに、円後の一枚あり。呑却は三箇四箇なり。このとき、月未円時の見成なり。吐却は七箇八箇なり。このとき、円後の見成なり。月の月を呑却するに、三箇四箇なり。呑却に月ありて現成す、月は呑却の見成なり。月の月を吐却するに、七箇八箇あり。吐却に月ありて現成す。月は吐却の現成なり。

このゆゑに、吞却尽なり、吐却尽なり。尽地尽天吐却なり、蓋天盖地吞却なり。吞自吞他すべし、吐自吐他すべし。

*

IV. 1. 釈迦牟尼仏、金剛藏菩薩に告げて言く、譬如動目能揺湛水、又如定眼猶廻轉火。雲駛月運、舟行岸移、亦復如是《譬へば動目の能く湛水を揺がすが如く、又、定眼の猶火を廻轉せしむるが如し。雲駛れば月運り、舟行けば岸移る、亦復是の如し》。

2. いま仏演説の雲駛月運、舟行岸移、あきらめ参究すべし。倉卒に学すべからず。凡情に順ずべからず。しかあるに、この仏説を仏説のごとく見聞するものまれなり。もしよく仏説のごとく学習するといふは、円覚かならずしも身心にあらず、菩提涅槃にあらず。菩提涅槃かならずしも円覚にあらず、身心にあらざるなり。

3. いま如来道の雲駛月運、舟行岸移は、雲駛のとき、月運なり、舟行のとき、岸移なり。いふ宗旨は、雲と月と、同時同道して同歩同運すること、始終にあらず、前後にあらず。舟と岸と、同時同道して同歩同運すること、起止にあらず、流転にあらず。たとひ人の行を学すとも、人の行は起止にあらず、起止の行は人にあらざるなり。起止を挙揚して、人の行に比量することなかれ、雲の駛も月の運も、舟の行も岸の移も、みなかくのごとし。おろかに少量の見に局量することなかれ。雲の駛は東西南北をとはず、月の運は昼夜古今に休息なき宗旨、わすれざるべし。舟の行および岸の移、ともに三世にかかはれず、よく三世を使用するものなり。このゆゑに、直至如今飽不飢《直に如今に至るまで飽いて饑えず》なり。

4. しかあるを、愚人おもはくは、くものはしるによりて、うごかざる月をうごくともみる、舟のゆくによりて、うつらざる岸をうつるとみゆると見解せり。もし愚人のいふがごとくならんは、いかでか如来の道ならん。仏法の宗旨、いまだ人天の少量にあらず。ただ不可量なりといへども、隨機の修行あるのみなり。たれか舟岸を再三撈摠せざらん、たれか雲月を急著眼看せざらん。

5. しるべし、如来道は、雲を什麼法に譬せず、月を什麼法に譬せず、舟を什麼法に譬せず、岸を什麼法に譬せざる道理、しづかに功夫参学すべきなり。月の一步は如来の円覚なり、如来の円覚は月の運為なり。

動止にあらず、進退にあらず。すでに月運は譬喩にあざれば、孤円の性相なり。

6. するべし、月の運度はたとひ駛なりとも、初中後にあざるなり。このゆゑに、第一月、第二月あるなり。第一、第二、おなじくこれ月なり。正好修行これ月なり、正好供養これ月なり、仏袖便行これ月なり。円尖は去来の輪転にあざるなり。去来輪転を使用し、使用せず、放行し、把定し、逞風流するがゆゑに、かくのごとくの諸月なるなり。

正法眼蔵都機第二十三

仁治癸卯端月六日書于觀音導利興聖宝林寺 沙門

寛元癸卯解制前日書写之 懷杼